長崎市水道の歴史

木樋出土品

今から約340年前、長崎では水に不自由していたため、倉田次郎右衛門という人が自分のお金で水道をつくり「倉田水樋」と呼ばれました。

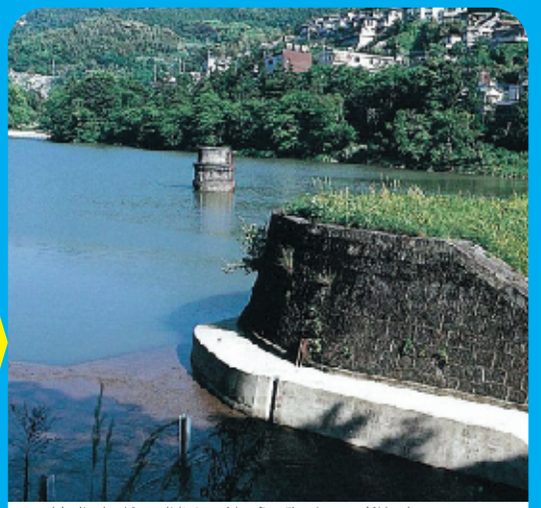
日下知事

吉村技師

金井区長

明治になると倉田水樋も古くなり、水がよごれて伝染病が流行したので、当時の日下知事と金井区長（現在の市長）は水道が必要なことで意見が一致し、吉村技師に設計を依頼しました。

しかし、水道を作るにはたくさんの費用がかかるため、長崎の町は賛成派と反対派の2つに別れて激しい争いがおこりました。



日下知事と金井区長の必死の努力によって、横浜、函館につぐ日本で３番目の近代水道として、明治24年３月に完成し、5月16日から給水が始まりました。
（写真は長崎水道発祥の地　本河内高部ダム）

長崎の人口もふえて水不足になったので、本河内低部ダム、西山ダム、小ヶ倉ダムをつくり、さらに第二次世界大戦のさなか、浦上ダムをつくりましたが、原子爆弾で大きな被害をうけました。

戦争が終わると、めざましい市の復興で水の使用量も大いに増え、ふたたび厳しい水不足にみまわれました。そのため２日に３時間しか水がでないようになり、自衛隊が出動することまでありました。

そこで、神浦ダムや雪浦ダムなど多くのダムをつくりました。大村市の萱瀬ダムからは、大村湾の海底に水道管をとおして33キロメートルはなれた浄水場に水をもってきました。（写真は大村市の萱瀬ダム）

水は私たちのくらしで食事に、おふろに、せんたくにと、とても大切なものです。また、水は学校、工事、病院でもたくさん使いますし、火事のときにも必要です。このように水は、あらゆるところで使われています。